

人から人を繋ぐヘルスプロモーションの明日

～授業研究の<眼>から見た
豊かな学びの連鎖と健康なまちづくり～

著者名 住田 実

所 属 大分大学教育学部（健康教育学）

大分大学大学院（教育学研究科・保健科教育学）

I

はじめに

授業研究の<眼>から「コミュニティを巻き込むカリキュラム」と「生活者の主観」への着目を考える

学校における健康教育の研究課題をめぐっては、「教師による上から下への一方的な指導では限界がある」といわれてきた。授業研究の「古くて新しい問題」である。

立場を変え、同様の指摘はヘルスプロモーション研究者からもある。島内憲夫は、「従来の学校での健康づくりは、閉ざされた学校の中だけで、先生が子どもの健康のみを教えるという構図の中で展開されてきた」¹⁾と述べるとともに、その改善方策の視点として、「ヘルスプロモーションの視点にたてば、コミュニティを巻き込み公式・非公式なカリキュラムを活かすことが焦点となってくる」²⁾（傍点は引用者）としている。すなわち、学校における健康教育の改善策を「学校」という枠から、さらに家庭・地域を結ぶコミュニティまで広げたカリキュラムにより考えようというわけである。

島内はこれに関連して、「ヘルスプロモーションは、<病気の原因となるリスクファクター（危険因子）>から<健康をつくるハッピファクター（幸福因子）>へのシフトを訴えていると考えると理解しやすい」とも言う。こうしたリスクファクター重視の「今までの健康づくりはトップダウン方式で、外から無理やり与えられたものだから失敗が多い。これに対して、筆者が考えているのは、生活者の主観を大切にするアプローチである」（傍点は引用者）。³⁾

島内による2つの着目点、すなわち「家庭・地域を結ぶコミュニティまで広げたカリキュラム」と「生活者の主観を大切にするアプローチ」は、実は学校における授業研究の新潮流にも通じる観点である。

1. ヘルスプロモーションにおける2つの健康教育 —旧来の「指導型」と「学習援助型(健康学習)」の区別

一般にヘルスプロモーションは、「政策的働きかけと教育的働きかけ（健康教育）から成り立つ」といわれるが、とくに後者の健康教育については吉田 亨らによる2通りの概念規定が定着している。1つは、旧来の「指導型の健康教育」。もう1つは、健康学習と呼ばれる「学習援助型の健康教育」^{4) 5)}である。

「学習援助型(健康学習)」の特色は、旧来の「指導型」に比べて「対象者の理解が共感的」であり、「コミュニケーションの主体が対象者の側にある」という。「指導型が有効なのは、インスリン自己注射のような医療技術的行動が問題となる場合であり、他方、学習援助型が有効なのは、毎日の食事や運動習慣のような生活技術的行動が問題となる場合である」⁶⁾とされる。

といっても、「指導型」の健康教育は否定されるものではなく、「ヘルスプロモーションにおいては、生活技術的行動が問題とされる場面が多いため、学習援助型が教育的働きかけにおいて大きな比重を占めるが、医療技術的な行動が問題とされる場面では指導型も有効であると考えられ、両者が重なり合う部分も存在する」⁷⁾わけである。この指摘の趣旨は、学校における健康教育、とりわけ教科指導としての保健学習や教科外の保健指導（集団・個別）においても同様と考えられる。

2. ヘルスプロモーションにおける健康学習と ピア・エデュケーション

さて、先の「指導型」を学校現場に即していえば、まさに「教師による上から下への指導」といえよう。一方、「コミュニケーションの主体が対象者（子ども）の側」にあり、「共感的な理解」を伴う「学習援助型」としての健康学習は、子どもを学習の主体者とする授業研究の対象である。考えてみれば、いわゆる教育

学における授業・教材研究は、まさに子どもの生活経験の中に学習課題を発見させ、その課題解決の主体的な学習を展開させるために、どのような具体的な「学習援助のあり方」が望ましいのかを研究対象としてきたともいえる。そして教育現場における多くの焦点は、教育内容研究、教材研究、そして教師の指導技術（教授行為）に当てられてきた。^{8) 9)}

そのような状況の中で、近年、「教師一子ども」という従来とは別のパターンとして、（教師が適切なマネジメントの役割を担いながらも）「子ども同士の学び合い」の中から健康認識や自己効力感を高めるピア・エデュケーションの教育方法が注目されている。¹⁰⁾ 先に述べた「学習援助型」としての健康学習が「コミュニケーションの主体は対象者の側」にあり、「共感的な理解」を伴う健康教育と規定するならば、年齢の近い「子ども同士の学び合い」としてのピア・エデュケーションとは多くの共通点があると考えられる。

3. ピア・エデュケーションによる

「人から人を繋ぐ豊かな学びの連鎖」

ピア・エデュケーションあるいはピア・カウンセリング（仲間相談活動）は、主に薬物乱用防止やアルコール・喫煙問題、あるいは性教育、食生活など成長期にある青少年にとって深刻かつ喫緊の健康問題に対する打開策の1つとして、世界各国で注目されている手法である。例えば、WHOの専門委員会「思春期の人々のヘルスニーズ」¹¹⁾によれば、「思春期の若者は権威に対して錯綜した感情があるとともに、その初期には自尊心が損なわれる傾向もあり、それは同年代の仲間（若者）同士の効果的なカウンセリング・プログラムによって回復し得る」¹⁰⁾（傍点は引用者）という。

また、さらに注目されることは、例えば国際協力機構（JICA）の草の根・技術協力事業の実践レポートによれば、ピア・エデュケーションの学習効果は、それが対象とする同年代の仲間（若者）同士の学習意欲や自己効力感の向上のみならず、さらには「学生を取り巻く地域住民への波及効果としても好影響を与えていた」¹²⁾（傍点は引用者）という点が注目される。

このようなピア（同年代の仲間同士）を核とした教育活動の取り組みは、発展途上国の健康教育プログラム（WHO、ユニセフ）としての Child To Child プログラム^{13) 14) 15)} やアクションリサーチへの子どもの参画¹⁶⁾においても根幹を成しており、子どものみならず地域の健康意識の向上にも好影響を及ぼすことが

多くの実践において報告されている。このことは、次に述べる日本ヘルスプロモーション学会第14回学術大会（大会長・住田 実）の学会テーマの設定においても、有力な根拠としたものである。

II | 人から人を繋ぐヘルスプロモーションの豊かな学びの連鎖

本学会第14回学術大会の学会テーマ「人から人を繋ぐヘルスプロモーション～豊かな学びの連鎖と健康なまちづくり～」の設定において、「人から人への豊かな学びあい」は、単に「大人（教師・親・医療関係者 etc.）から子ども（住民）」へという一方通行ではなく、さらに多様な「子どもから大人へ」「大人から子どもへ」「大人から大人へ」「人から人へ」という「伝えあい」「学びあい」により、ヘルスプロモーションをめぐる教育実践的な視点から新たな発想や柔軟な視点での議論をめざしたものである。

例えば、同学術大会「シンポジウム(2) 人から人へ繋ぐヘルスプロモーション～豊かな学びの連鎖～（座長：阪本直人）」では、次の4パターンにより実践発表を行っている。

①「子どもから大人へ」

（堤 円香：子供の言葉は親を変えるか
～小中学校での喫煙予防教育より～）

②「大人から子どもへ」

（三好 綾：いのちの授業を通して）

③「大人から大人へ」

（河村洋子：働き盛り層の健康づくりのための
コミュニケーション戦略）

④「人から人へ」

（助友裕子：Learning Partner Modelに基づく
健康情報の普及）

このような立場を変えながらの双方向の「伝えあい」「学びあい」を基盤とした発想は、ヘルスプロモーションをめぐって教育実践的な視点から新たな発想や柔軟な視点で議論をすすめ、共に考え学びあう有力な機会である。その成果は、本誌掲載の各レポートを参照されたい。

III | ピア（異年齢・同世代の仲間集団）が育む健康認識

●「教える」ことによって「学び」「成長する」

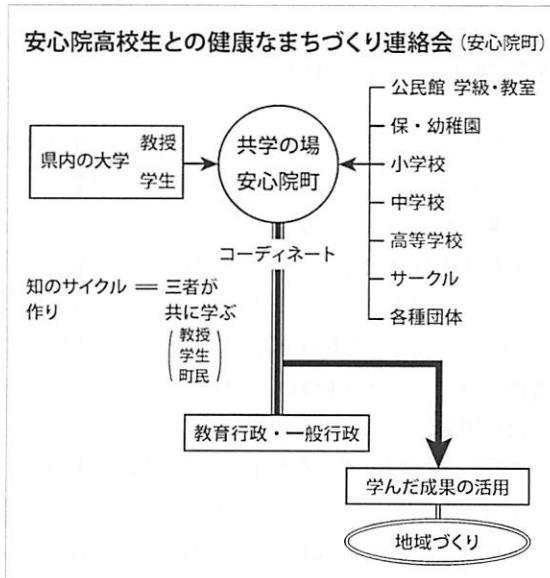
児童と高校生たち

そして、次に紹介する5つめのパターン——「子ど

「もから子どもへ（高校生から児童へ）」^{17) 18) 19) 20)}は、筆者が15年間にわたって追跡研究してきた実践である。

大分県宇佐市安心院（あじむ）町。その町の児童の多くは、「小・中・高一貫教育」として地元の安心院中学・高校に進学する。そして、その高校生たちは、毎年、地元の後輩である児童を訪問して、「食育授業（保健劇・ゲーム・学習活動）」に手づくりの「食べる授業（健康によい食べ物・おやつ）」も含めて交流学習を深めている。

きっかけは、地域保健としての「健康あじむ21」（安心院町・高校生と取り組む健康な町づくり連絡会）から高校側への提案であり、ともすれば「溝」があるがちな地域保健と学校保健の連携・融合として注目の事例である。



高齢化・過疎化に悩む町として、地元高校生が同じ地元の児童のために健康教育プログラムを創出・実践しながら交流を深めることによって、保護者の子育て意識改革も含めたく健康な町おこし（安心して生活できる安心院町）を実現できないか——。

（『安心の里・健康プラン21』

大分県宇佐市安心院町）



実践研究^{17) 18) 19) 20)}の成果に学びながら、ここでは次の2つの観点から表題「人から人を繋ぐプロモーションの明日」に迫りたい。

【観点①】養護教諭が異年齢・同世代の仲間集団による学び合いをコーディネートする

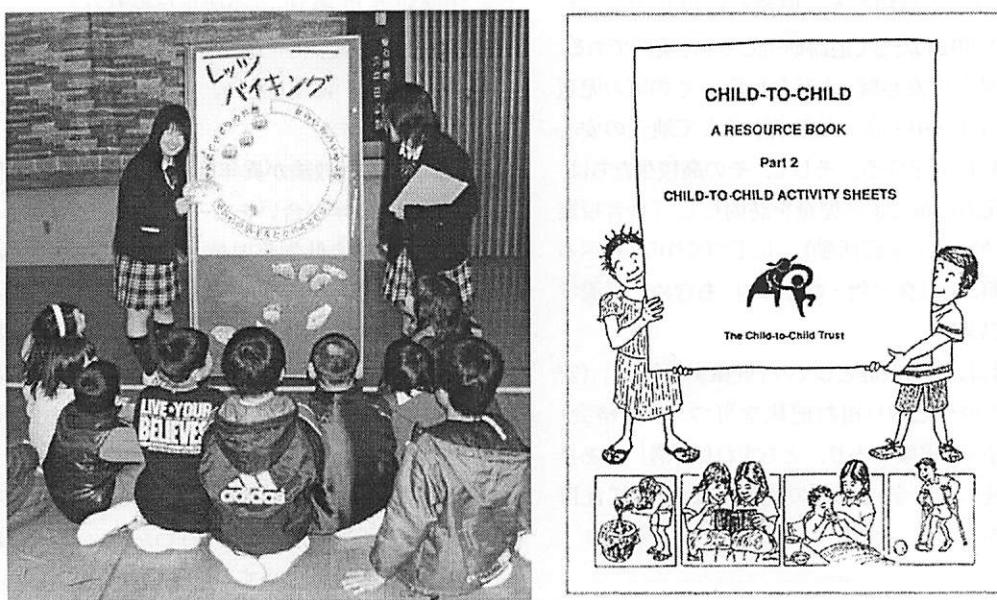
高学年児童と低学年児童、児童と中学生、児童と高校生 etc. という関係は、大人から見れば同世代に近い仲間集団である。食に関する指導、性に関する指導、喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育、基本的生活習慣についての指導など、大人が子どもに指導する場合は、「わかっている、もう聞き飽きた」と反応を示さないことがある。しかし、ピア集団で小グループを作り、年下の子どもにも「わかる」ように資料を作成したり話術を吟味する。そのプロセスにおいて、学校における健康教育の専門家である養護教諭が、子ども同士の学び合いが円滑になるようにコーディネートする。すなわち、子ども同士に任せて放任するのではなく、養護教諭によるピア集団の組織力、指導力が問われる。

なおピア・エデュケーションは、従来の教育方法に唯一無二のものとして提案されたものではなく、多様な教育的アプローチが追究される中から生まれた1つの有力なアプローチに過ぎない。しかしながら、その効果に関しては、広く性教育、薬物乱用防止教育などで目覚しい効果が立証されており、「この手法は、思春期の人々の主体的な行動変容を支えるために有効な方法であるとWHOはじめ、国際的レベルで高い評価を得ている」²¹⁾といわれる。



【観点②】子どもから子どもへ、さらに家族から地域の大人たちへの波及

先にも触れたように、世界各国の衛生や栄養の改善に取り組むWHOやユニセフなどの国際機関では、



Child To Child の事例 (左 : 日本 (安心院町)^{17) 18)} / 右 : 外国²³⁾

Child To Child プログラムという教育方法が用いられている。健康教育で、特に NPO や国連ユネスコが、発展途上国の方々に指導内容を広めようとする場合、広い地域で村落が点在しているため、専門家がジープで渡り歩くにはどう考えても時間も労力も無く、人材が足りない。そこで窮余の策として編み出されたという。

ロンドン大学の David Morley 教授が主催する Child To Child プログラム活動に日本の栄養学研究者として当初より参画している足立己幸は、次のように述べている。

「当時 Child-to-Child Program は主に開発途上国で、学校で学ぶ子どもたちが学んだことを年下の子

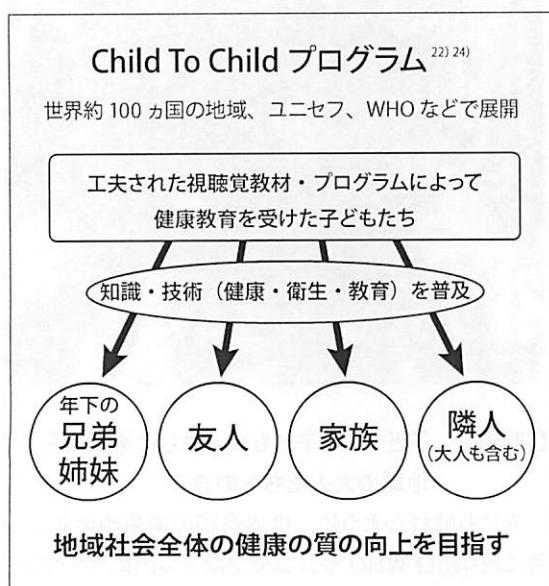
どもたちへ、家族へと伝えることにより、自分自身の学びを確かなものとしつつ、その家族や地域への普及効果をねらうことが基本であった。この時、子どもが発信する教材にミスがあってはならない、楽しいものでなければならない、地域性を活かしつつ次への課題が膨らんでいくものであってほしいと、多分野の専門家チームによる検討が重ねられていた。」²²⁾ (傍点は引用者)

ここで足立が述べている点は、2つの要素に分けられる。

- ① 子どもたちが学んだことを年下の子どもたちへ、家族へと伝えることにより、自分自身の学びを確かなものとしつつ、その家族や地域への普及効果をねらう。
- ② 使われる教材は楽しいものでなければならない。地域性を活かしつつ次への課題が膨らんでいくものであってほしい

これらの要素は、実は本稿のはじめに引用した島内の 2 つの着目点^{25) 26)}について、まさに教育プログラムの観点から具現化しているともいえよう。

子どもたちが、各村落から、山を越え、谷を越え、小川を渡って途中で棒きれなどの燃料を拾って集まつてくる。その燃料でお米を炊き、スープを温め美味しい給食ができる。学校に行けばおいしい給食を食べられたため、給食は発展途上国の栄養教育の一環として始められた。給食で栄養を摂ると同時に、優れた教材による指導では、「なぜ手洗いが大事なのか」「どうして放置した食べ物に虫がつくのか」「どうして時間が経った食べ物は体に悪いのか」など疾病予防、衛生・



栄養教育などを実施。そして、学んだ内容を家庭に持ち帰り、兄弟の中で年上の子どもが年下の子どもに教え、次は父母や祖父母等の家族に話し、地域の方々に伝える。これが Child-to-Child プログラムであり、現在では約 100 カ国で取り組まれているという¹⁵⁾。

まさに、島内が指摘したコミュニティを巻き込み、公式・非公式なカリキュラムを活かし、生活者の主観を大切にするアプローチなのである。

IV | 心温まる「ジェネレーション（世代）の循環」と健康なまちづくり

●「同世代の仲間（ピア）集団」が育みあう

豊かな健康教育の可能性

地域社会の要請を受けて始まった「高校生による地元児童への健康教育」の実践においては、その「学び手」は毎年の「お兄さん・お姉さん先生たち」の来校を心待ちにする児童ばかりではない。同町の「健康なまちづくり連絡会」では、

「高校生が地元児童に対して工夫しながら指導することでお互いに学習し合い、かつ新鮮で親近感をもつて＜健康づくり＞や＜生活習慣病の予防＞に関心をもてるようになる」ことが企画の段階で意図されている。

「同世代の仲間（ピア）集団」による相互教育効果の可能性が脚光を浴びている今日、先の高校生たちはまさに「教える」ことによって「学ぶ」²⁷⁾ことを実現させている。具体的には、児童向けの「話し方」の訓練も含めて、今後は児童を高校に招待して学習の機会を設けることも考えているという。その交流のなかから、児童たちの「年間を通じた農作物の栽培」や「感想文」の分析に対応させた指導内容や教材を研究し、次年度に扱うテーマを検討する。一方、児童は帰宅して習ったことを家族に話し、高校生は健康フェアの催しでは、対象を高齢者にかえて健康プレゼンを実施することもあるという。



高校生と児童によるピア・エデュケーションの様子^{17) 18)}



学年混在グループによって説明に聞き入る児童
高校生の説明に熱心に聞き入る児童（写真）が
数年後には進学して高校生となり、立場を逆転
したピア・エデュケーションが展開される。



「高校生の訪問授業」を受け入れた児童たちは、
やがて数年後には「将来のお兄さん・お姉さん先生」として母校に「回帰」し、後輩児童たちと交流する。
一つの小さな町で、まさに心温まる「ジェネレーション（世代）の教育循環」が成立しているのである<sup>17)
18) 28) 29)</sup>。人から人を繋ぐヘルスプロモーションの明日を考えるとき、豊かな学びの連鎖と健康なまちづくりのモデルとして広く伝えていきたい教育事例である。

文 献

- 1) 島内憲夫 (2011) : 子どもの生きる力を育む健
な学校づくり、学校保健研究、53 (4) : 276
- 2) 島内憲夫 (2011) : 前掲論文 1) : 276
- 3) 島内憲夫 (2001) : 健康生活習慣とヘルスプロモー^シション～がん予防をめざして～、順天堂医学、47
(3) : 317 – 318
- 4) 吉田 了、河口てる子、川田智恵子 (1992) : 患者
教育の新しい考え方、プラクティス、9 : 58 – 59
- 5) 吉田 了 (1994) : 指導型の教育と学習援助型の教
育、臨床栄養、85 : 621 – 627
- 6) 吉田 了 (1996) : 健康教育・健康学習とヘルスプロモーション、日本健康教育学会誌、3 (1) : 8
- 7) 吉田 了 (1996) : 前掲論文 6) : 9
- 8) 日本教育方法学会・編(2009) : 日本の授業研究(上
巻) 授業研究の歴史と教師教育、学文社
- 9) 日本教育方法学会・編(2009) : 日本の授業研究(下
巻) 授業研究の方法と形態、学文社
- 10) 高村寿子 (1995) : ピア・カウンセリングで進める
健康教育の可能性、健康教室、56 (9) : 90 – 97
- 11) WHO (1992) : Approaches to Adolescent
Health and Developmentprince for success.
WHO/ADH
- 12) 江角伸吾、他 5 名 (2014) : メキシコ合衆国で
の思春期ピア・エデュケーションが地域住民の健
康意識に及ぼす影響、国際保健医療、29 (4) :
267 – 275
- 13) Carnegie R. (2003) : Child-to-Child and The
Growth and Development of Young Children.
Richmond Publishing Co.
- 14) 西田美佐 (2002) : 発展途上国における栄養教
育～「参加」を重視する考え方や手法・とくに「子
どもの参画」に焦点をあてて～、臨床栄養、101
(7) : 786 – 793
- 15) 足立己幸 (2007) : 「食」育は子どもから家庭へ、
学校へ、地域へ発信、日本健康教育学会誌、15
(4) : 237 – 244
- 16) ロジャー・ハート (2000) : 木村 勇、他訳『子
どもの参画』萌文社、東京 : 90 – 106
- 17) 住田 実 (2005) : 子どもたちの健康認識を高め
自立を支援する健康教育の新たな“学び”を迫つて
～<異年齢・同世代の仲間集団>が育む豊かな学
びあいの可能性～、健康教室、56 (9) : 4 – 13
- 18) 住田 実 (2010) : 再び、子どもたちの健康認識
を育むヨコ糸(年間指導)とタテ糸(学年積み
上げ)を紡いで～「教える」ことによって「学び」
「成長する」児童と高校生たちの追跡事例から～、
健康教室、61 (9) : 3 – 12
- 19) 住田 実 (2010) : [研究成果報告書] 平成 19
～21 年度科研費：基盤研究 (C) 高校生と児童
が共に育むピア・エデュケーション(食教育)の
継続実践とその追跡研究 (課題番号: 19500682)
- 20) 住田 実 (2015) : [研究成果報告書] 平成 22
～26 年度科研費：基盤研究 (C) 食育体験を通
して小・高・大学生が共に学びあうピア・エデュケー
ションの実践的研究、(課題番号: 22500763)
- 21) 高村寿子 (1995) : 前掲論文 10) : 91
- 22) 足立己幸、前掲論文 15) : 237
- 23) 西田美佐 (2002) : 前掲論文 9) : 788
- 24) 永井成美 (2011) : 子どもから子どもへ伝え学び
あう食育、住田実・健康教育学監修、子どもが変
わる生活を変える・食教育4つのステージ、東山
書房、京都 : 201
- 25) 島内憲夫 (2011) : 前掲論文 1) : 276
- 26) 島内憲夫 (2001) : 前掲論文 3) : 317 – 318
- 27) 杉江 修治、梶田 正巳 (1989) : 子供の教授活動
の効果、教育心理学研究、37 (4) : 381-385
- 28) 住田 実 (2004) : 多様なジェネレーション(世代)
の交流とその豊かな可能性、授業づくりネット
ワーク、17 (10), 22-24
- 29) 住田 実 (2008) : [授業成立の基礎・技術教師
教育物語] 高校生ゲストティーチャーの成長の姿
に「将来の自身の姿」を重ねる“教師の卵”たち、
授業づくりネットワーク、21 (3) : 49-51